

条件表現とモダリティ表現の接点—文法史の視点から

高山善行（福井大学）

1. はじめに

文法研究において、条件表現とモダリティ表現との関係については、よくわかっていない部分が多い。本発表では、文法史の視点から、両者の接点について考えてみる。今回は、古代語の条件節に焦点を当てて、「未然形+バ」節とモダリティ形式「ム」の表現との関係を見ていく。仮定条件表現の成立条件についても考えてみたい。

[日本語史の時代区分] (高山・青木 2010)

上代語 (奈良時代およびそれ以前：～794年)	古代語
中古語 (平安時代：794年～1192年)	
中世語 (鎌倉・室町時代：1192年～1603年)	近代語
近世語 (江戸時代：1603年～1868年)	
近代語 (明治・大正・昭和前期：1868年～1945年)	
現代語 (昭和後期・平成：1945年～)	

2. 問題のありか

日本語の複文構造を考える上で、従属節とモダリティとの関係は重要なテーマの一つであろう。これまでの研究では、「意味の階層性」(南 1993)、「従属節にモダリティを認めるかどうか」(近藤 2000)などが論じられてきた。今回は条件節を対象とし、モダリティとの接点について考えてみたい。

条件節とモダリティ表現は事態の「現実—非現実」の対立と関わり、意味的に類似する面がある。たとえば、益岡(2007)では、「ナラ」形式を「話し手の態度にかかわるモダリティ表現」と位置づけている。古代語については、福田(2006)が、未然形に付く「バ」を「概言のモダリティと接続の意味とを併せて表す形式」とする。「条件表現とモダリティ表現は、どのような関係にあるか」という問題は、現代語、古代語ともに文法研究の課題である。

ただし、現代語はモダリティ形式が節中に生起しにくく、条件節との接点が捉えにくいのが、古代語ではモダリティ形式が節に生起し、接点を捉えやすい面がある。以下では、古代語の順接仮定条件節を対象として考究を行う。史的変遷については、高山・青木(2010)「第11章 条件表現」を参照されたい。

古代語では、「未然形+バ」によって仮定条件を表すのが一般的である(ただし、形容詞の場合は「連用形+ハ」となる)。

(1) 明日さへ降らば若菜つみてむ (明日もまた(雨ガ)降ったら若菜を摘もう) (古今・20) (2) 東風

吹かばにほひおこせよ（東風が吹いたら香りを送って来い）（拾遺・1006）

(3) 恋しくはとぶらひ来ませ（恋しく思ったら訪ねていらっしやい）（古今・982）

古代語で仮定条件を表す表現は「未然形+バ」だけではない。モダリティ形式「ム」（「推量の助動詞」）の表現が仮定条件を表すことがある。「～ムニ」「～ムハ」の表現である。

(4) 「に」の接続表現のうち、前句が「……むに」の形をとるものには、両句の間に仮定条件関係に相当する意味関係も認められる。」（山口 1984 : p. 170）

(5) 「…「未然形+ば」の原形は、未然形に推量の助動詞「む」が付いた準体句を係助詞「は」が受ける、「未然形+む+は」と見てよかろう。……そういう形を含む、「準体句+は」形式に、意味上、しばしば条件表現との類似性が認められるという傍証も得られる。」（山口 1996:p. 131）
注：「バ」の語源として、「ム+ハ」を想定する説がある（大野晋など）。

本発表では、助動詞「ム」+助詞「ニ」、助動詞「ム」+助詞「ハ」が構成する節表現を取り上げてみたい。以下、それぞれを、「ムニ節」「ムハ節」と呼ぶ。

ムニ節：(帝)「さもなりなむに、いかが思さるべき。…」源氏・2-189
(そんなことにでもなったら、あなたはどうお思いであろう)

ムハ節：(源氏)「同じ心に答へたまはむは、願ひかなふ心地なむすべき。」源氏・1-351
(姫君がわたしと同じ心になってご返事をくださるならば、それこそ願いがかなったという気持になるのだが)

両者は常に仮定を表すわけではなく、そのため条件表現の研究では対象とされていない。また、「ム」の記述は文末用法に偏っており、「ム」の研究でも正面から扱われていない。以下では、ムニ節、ムハ節の用例を観察・分析し、「未然形+バ」による節（以下、「未然バ節」と呼ぶ）との比較、相対化を試みる。そのなかで、仮定条件表現の成立要件、現代語との関係についても考えてみたい。

上代語では『万葉集』（新全集・小学館）、中古語では『枕草子』（新全集・小学館）、『源氏物語』（旧全集①②・小学館）を調査資料とした。挙例・現代語訳も以上の注釈書による。なお、表記としては、「む」と「ん」の両方が現れるが、煩雑を避けて「む」に統一した。

3. 「ム」の基本的性質

ムニ節、ムハ節を観察する前に、「ム」の基本的性質について確認しておく。「ム」の活用、接続、意味は、以下の通りである。

活用

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
む	(ま)	○	む	む	め	○

※未然形「ま」はク語法に見られる特殊な形

接続：活用語の未然形に付く。

意味：文末用法

①推量〔～ウ・～ヨウ・～ダロウ〕まだ実現していないことについての予想・想像 深きゆゑあらむ。
(深いわけがあるのだろう。)(徒然草・236)

②意志〔～ウ(トスル)・～ヨウ(トスル)・～タイ〕動作主の決意や希望
心ざしはせむとす。(お礼はしようと思う。)(土佐日記・二月十六日)

③適当・勧誘〔～ノガヨイ(ダロウ)・～テクダサイ〕控えめに勧める意
とくこそ試みさせ給はめ。(早くお試しなさるのがよいでしょう。)(源氏物語・若紫)

意味：文中用法(連体法・準体法)

④仮定・婉曲〔～タラ・～ヨウナ〕いま秋風吹かむをりぞ来むとする。(もうすぐ秋風が吹いたら、そのとき帰って来よう。)(枕草子・虫は)

以上、山口堯二『新講古典文法』文英堂による

古典文法では、「ム」が文中で仮定を表す用法が知られており、「仮定用法」(または「仮定・婉曲用法」と呼ばれている(ムの連体用法については、高山(2005)参照)。山田文法では、「ム」の意味を「設想」(「事態を頭に思い浮かべる」とする。

古代語「ム」は、現代語のモダリティ形式一般とは異なり、節中にしばしば現れる。

(6)見む人の心には従はむなむあはれにて、わが心そのままにとり直して見むに、なつかしくおぼゆべき。源氏・1-262

(夫の気持には従順というふうなのが、いとしく思われて、自分の思いどおりに性質を直して妻としたら、情愛の深まる思いがすることだろう。)

(7)また、なのめにうつろふ方あらむ人を恨みて、気色ばみ背かむ、はたをこがましかりなむ、源氏・1-143

(また、夫がちょっとほかの女に心移しでもしようものなら、それを恨み、むきになって仲違いするとしたら、それもばかげたことでしょう。)

4. 観察—ムニ節とムハ節

本節では、古代語(上代語+中古語)でムニ節、ムハ節の実例を見ていく。

4. 1 上代語

●ムニ節

『万葉集』中にムニ節は全7例あるが、ムハ節は1例もない。ムニ節で仮定を表すのは『万葉集』で(13)のみであり、東歌(東国の歌)である。全体的に、現代語「～タメニ節」に相当する例が目立つ。もともと格助詞「ニ」には目的を表す用法があり、その反映と見られる。「ム」の意味は前面に出てきていない。

(8) 妹が家も継ぎて見ましを大和なる大島の嶺に家もあらましを〈一に云ふ、「妹があたり継ぎても見むに」〉〈一に云ふ、「家居らましを」〉 2-91

(あなたの家だけでも、いつも見られたらよいのに 大和の国の 大島の嶺に あなたの家がありさえすればよいのに〈また「あなたの辺りをいつも見るために」〉〈また「わたしの家があってそこに住んでいるのだったらよいのに」〉)

(9) ぬばたまの夜渡る月を留めむに西の山辺に塞もあらぬかも 7-1077

(夜空を渡る月を引き留めるために西の山辺にとりでもないものか)

(10) 春日山山高からし岩の上の菅の根見むに月待ち難し 7-1373

(春日山の山が高いせいだろうか 岩の上の菅の根を見たいのに 一向に月が出そうにない)

(11) 思ふ児が衣摺らむににほひこそ島の榛原秋立たずとも 10-1965

(いとしいあの娘が衣を摺るのに色づいてほしい 島の榛原よ 秋ではなくても)

(12) 天の川棚橋渡せ織女のい渡らさむに棚橋渡せ 10-2081

(天の川に棚橋を渡せ 織女星が渡られるために棚橋を渡せ)

☆(13) 奥山の真木の板戸をとどとして我が開かむに入り来て寝さね 14-3467

((奥山の) 真木造りの板戸をどんと押して わたしが開けたら 入って来て寝てよ)

(14) 帰るさに妹に見せむにわたつみの沖つ白玉拾ひて行かな 15-3614

(帰りがけに妻に見せてやるために 大海の沖の白玉を拾って行こう)

4. 2 中古語

次に、中古語の例を見ていく。『枕草子』『源氏物語』の例を挙げる。

●ムニ節

仮定を表す例

(15) 馬頭「～、わがものとうち頼むべきを選らむに、多かる中にもえなん思ひ定むまじかりける。…」源氏・1-137

(「通りいっぺんの女性関係としてつき合っている分には欠点がない人でも、いざ自分の妻として頼りにできる人を選ぶという場合になると、たくさんの女の中でも、なかなかこの人と決めかねるものです。」)

(16) 「～院にも、ありさま奏しはべらむに、推しはからせたまひてむ」と聞こえたまふ。源氏・2-56 (院にも、この有様を奏上いたしましたら、ご推察あそばされることでございましょう)

(17) ムニ十ハ

それもむげに心ざしなからむには、げに何しにかは、作り事にも見えむとも思はむ。枕・426 (それも全く志がないような場合には、なんで、そんなに作り事をしてまで逢おうとも思おうか。)

(18) ムニハ (少納言) 「～宮の渡らせたまはむには、いかさまにか聞こえやらん。…」枕・329 (父宮がここにお見えになりましたら、どういふふうに申し開きいたしましょう。)

仮定を表さない例

(19) 理由：(女) 「いとけ近ければかたはらいたし。なやましければ、忍びてうち叩かせなどせむに、ほど離れてを」枕・186 (「お客さまの御座所にととも近いので、具合が悪い。気分が悪いから、こっそりと人に肩や腰を叩かせなどしたいと思いますから、離れたところに」)

(20) 理由：(源氏) 「～かの尼君などの聞かむに、おどろおどろしく言ふな、かかる歩きゆるさぬ人なり」…源氏・1-242 (「あの尼君の耳にはいるかもしれぬから、大げさに言うなよ。こんな忍び歩きにはやかましい人なのだ」)

(21) 時間：「～まだ明けざらむに帰りぬべし。…」枕・141
(「まだ夜が多分明けないころに、きっと京に帰りつくだろう」) 消息

(22) 場所：さる心細からん海づらの波風よりほかに立ちまじる人もなからむに、かくらうたき御さまにてひき具したまへらむもいとつきなく、…源氏・2-154
(そのような心細い海辺の波風よりほかには往来する人もなさそうな所に、こんなにいたいけなご様子でいらっしゃる方をお連れになるのもまったく不相応であるし、)

逆接仮定の例

(23) 「宮の御みこたちとて引き出でたらむに、わるく侍らじかし」などのたまはするを、枕・205 (「中宮様の御子たちだといって人前に引き出したところで、劣ることはございますまいよ」)

【ムニ節の特徴】

ムニ節は、順接、逆接ともに用いられる。ムニ節が表す意味は、仮定、理由、時間、場所など多岐にわたる。意味の多様性は基本的には、「ニ」の接続用法と同じようである。ただし、「ハ」が加わって「～ムニハ」となると仮定の解釈にほぼ限定される。

●ムハ節

仮定を表す例

(24) ～、すべてこのごろ、うちしきり見ゆる人の、今宵いみじからむ雨にさはらで来たらむは、なほ一夜もへだてじと思ふなめりと、あはれなりなむ。枕・425 (総じてこのごろ頻繁に訪れる男が、今夜ひどい雨にめげないでやって来るような場合は、やはりその男は一晩も隔てないようにしようと思うようだと、女もしみじみと身にしみて感じるにちがいない。)

(25) (源氏) 「～同じ心に答へたまはむは、願ひかなふ心地なむすべき。」源氏・1-351
(姫君がわたしと同じ心になってご返事をくださるならば、それこそ願いがかなったという気持になるのだが)

仮定を表さない例

(26)場所：～、またとまるべからむは、とどめなどもしつべし。枕・427
(また、泊ってもよさそうな所では、引き止めなどもきつとすに違いない)

(27)重しととも、いとかうあまり埋もれたらむは、心づきなくわるびたりと、源氏・1-349
(「いくら重々しいご気性といったところで、まったくこのようにあまりに引込み思案でいるのはおもしろくないし、体のよいものではない」)

【ムハ節の特徴】

ムハ節は順接に限られ、逆接は見られない。時間、理由を表す例も見られず、ムニ節に比して、仮定で解釈できる例の割合が多く、意味の幅はかなり狭いといえる。

5. 未然バ節との関係

ムニ節・ムハ節と未然バ節との共通点と相違点を挙げてみる。

●共通点

仮定の意味を表す。後件に生起するモダリティ形式は、「ム」「ベシ」が多い。

●差異

①未然バ節は和歌の例があるが、ムニ節・ムハ節には用いられにくい。※(13)のみ

②未然バ節は後件で命令を表す例があるが、ムニ節・ムハ節にはない。

(28)「もし聞き出でたてまつらば告げよ」源氏 1-335 (「もしお聞きだし申したら知らせなさい」)

③未然バ節には、とりたて助詞(副助詞)との呼応が見られるが、ムニ節・ムハ節には見られない。注：とりたて助詞「ダニ」は条件節内に生起することが多い(高山 2003)。

(29)「今年よりだに、すこし世づきてあらためたまふ御心見えば、いかにうれしからむ」源氏・1-394 (「せめて今年からだけでも、少し世間なみの夫婦らしくお改めくださるお気持ちが見えたら、どんなにうれしいでしょう」)

④未然バ節は反事実を表す例があるが、ムニ節・ムハ節にはない。

(30) (女)「昼ならましかば、のぞきて見たてまつりてまし」源氏・1-174 (「昼間だったら、のぞいて拝見するのだけれど」)

未然バ節は仮定条件が明示されるが、ムニ節・ムハ節は文脈依存的であるため、文脈の支えが得られない和歌では用いられにくい。両者は、文章における節連続の流れの中で有効に用いられる表現といえる。

後件で命令表現に展開しにくいのは条件の非明示性に起因すると思われる。「命令・依頼」で他者に行為を指示する際には、条件の明確化が求められるからである。とりたて助詞(副助詞)と呼応して、「せめて～だけでも…すれば」という最低条件を表しえない点も条件の非明示性に関わる。反事実性を表さない点は別に説明する必要がある。今後の課題である。ムニ節・ムハ節は、その一部で仮定条件を表し得たとしても、「未然形+バ」が有するプロトタイプ的な条件表現の要件を欠いている。「疑似条件節」とでもいえる存在である。

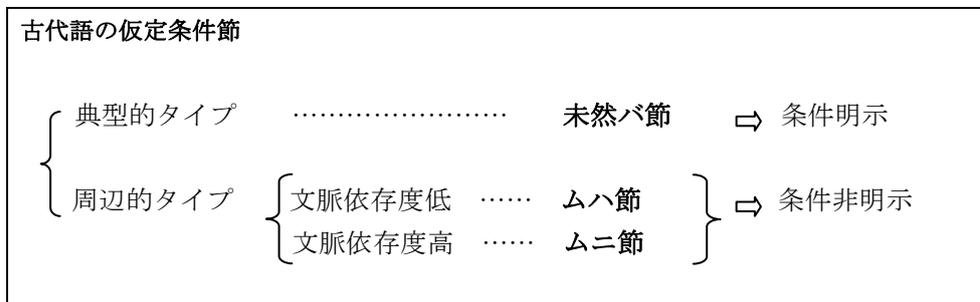
ここで、ムニ節とムハ節を比べてみると、文脈によって意味が多岐にわたる点、仮定を明確化するために「ハ」による補強が必要となる点から、ムニ節の方が相対的に文脈依存度が高いといえる。ムハ節は、「ハ」が組み込まれているので、容易に仮定条件を表すことができる。

助詞「ハ」は仮定条件が成立する上で重要な役割を果たす。益岡(2007)では、「ハ」の機能によって、主題Xと解説Yとの相互依存関係が生じることを述べているが、その指摘は仮定条件文の基底構造を考える上できわめて重要である。

なお、ムニ節、ムハ節の「ム」には「推量」などの判断的意味は感じられない。高山(1995)では、連体用法の「ム」を「非現実性の標識」と位置付けているが、～ムニ、～ムハの「ム」もそれと異なるものではない。仮定条件が成立する上では、「ニ」「ハ」の働きがきわめて大きいと思われる。なお、仮定条件の成立には、後件のモダリティも関与していると思われる。

未然バ節、ムニ節、ムハ節の関係をまとめると下図のようになる。

図 まとめ



6. 現代語との関係

古代語の条件節には、典型的タイプと周边的タイプが認められた。現代語においても、「レバ」「タラ」「ナラ」のように典型的な形式と「場合」「テハ」のような周边的形式がある。ムニ節・ムハ節は、反事実を表さない点、後件で命令を表さない点で、現代語の周边的な条件節（「場合」「テハ」など）と類似する。条件節に二つのタイプが用意されている点は、古代語と現代語とで共通する。

複雑な文章・談話においては、条件性を弱めに抑えて節連続の流れを良くするタイプと条件性を明確に押し出すタイプの両方が必要であり、この点は、古代語と現代語で本質的に違いがないものと考えられる。結局は、条件性に比重を置くか、接続性に比重を置くかの違いである。

- (31) 停止中の路面電車がある場合で安全地帯がないときは、乗り降りする人がいる場合でも、路面電車との間に1.5メートル以上の間隔を保つことができれば徐行して通行できる。
 (『1回で受かる! 普通免許問題集』成美堂出版)

7. おわりに

現代語研究では、条件文の周边的形式にまで記述が及ぶが(仁田2004など)、古代語では助詞「バ」の研究に偏っている。周边的な形式に関する事実の掘り起こしは今後の課題である。古代語で仮定条件の成立を考える上でポイントとなるのは、助詞「ニ」「ハ」である。特に、「ハ」は、「二分結合」によって仮定条件文を構造的に支えていると見られる。語源論に矮小化せず、「どのような要因が仮定条件を成り立たせるのか」といった視点からの研究が要請される。

主な参考文献

- 有田節子(2007)『日本語条件文と時制節性』くろしお出版
- 尾上圭介(2001)『文法と意味 I』くろしお出版
- 小林賢次(1996)『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房
- 近藤泰弘(2000)『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
- 阪倉篤義(1993)『日本語表現の流れ』岩波書店
- 高山善行(2002)『日本語モダリティの史的研究』ひつじ書房
- 高山善行(2003)「極限のとりたての歴史的变化」沼田善子・野田尚史編『日本語のとりたて一現代語と歴史的变化・地理的変異』くろしお出版
- 高山善行(2005)「助動詞「む」の連体用法について」『日本語の研究』1-4、日本語学会
- 高山善行・青木博史編(2010)『ガイドブック日本語文法史』ひつじ書房
- 高山善行(2011)「第2章 述部の構造」金水敏他編『シリーズ日本語史3 文法史』岩波書店
- 仁田円(2004)「条件文の周辺形式「場合(には)」と「かぎり(は)」について一時間を表す文との関連を中心に」『大阪大学留学生センター研究論集』第8号
- 仁田義雄(2009)『日本語のモダリティとその周辺』ひつじ書房
- 福田嘉一郎(2006)「条件表現の範囲—古典日本語の接続助詞バをめぐる—」益岡隆志編『条件表現の対照』くろしお出版
- 前田直子(2009)『日本語の複文』くろしお出版
- 益岡隆志(1997)『複文』くろしお出版
- 益岡隆志編(1993)『日本語の条件表現』くろしお出版
- 益岡隆志(2007)『日本語モダリティ探究』くろしお出版
- 南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 山口堯二(1984)『古代接続法の研究』明治書院
- 山口堯二(1996)『日本語接続法史論』和泉書院
- 和佐敦子(2005)『スペイン語と日本語のモダリティ—叙法とモダリティの接点』くろしお出版